

ぐるり

高橋久美子

目次

柿泥棒	7
ロンドン	20
蟻の王様	34
美しい人	43
自販機のモスキート、宇宙のビート板	52
逃げるが父	62
猫の恩返し	73
サトマリ	84
D J久保田 # 1	92

星の歌 104

白い地下足袋 113

私の狂想曲 124

指輪物語 135

卒業式 143

5000ドンと5000円 152

スマイレ 165

私の彼方 176

四月の旅人 186

DJ久保田 #2 198

カバ | 装画・挿絵

装丁

奈良美智

宇都宮三鈴

柿泥棒

桜新町の駅に、いつものリュックサックを背負って優子がやってきた。

「小鳥ー!! もー。新宿まで来てくれるって言うてたやん」

「ごめんごめん、完全に寝てもうてたー」

半年ぶりに会う優子は、なんだかちよつと顔が丸々とした気がする。チワワがプリントされたスエットの上下でこの街を歩くのはやめてほしいけれど、それは後で言うことにしよう。と小鳥は思った。優子が来てくれたのが本当は嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

「へー。今度の街はなんか小綺麗やなあ。あんたの前おった、稲田堤やったかな。あそことは全然ちやうやん。あつちはなんや大阪みたいで、小鳥にようおうてたのにな」

「サザエさん通りの方へ行ったらもうちよつと下町風情やけどな」

と言ったけど、優子は殆ど聞いてない。いつものことだ。早朝の弦巻つるまき通りを歩きながら、お構いなしに関西弁を撒き散らす優子を見ると、自分が少しづつ東京に染まってきたのがわかった。恥ずかしいと思ったことなんてなかったのに、通り過ぎる人々の眼差

しを痛いと感じてしまふ自分が嫌だった。大声で笑って喋り続ける優子を引き連れて、動き始める社会の流れとは逆走して家へ帰る。スーツ姿の男たちが怪訝そうな顔で二人を見るが、やっぱり優子は気づいてない。

「高速バス疲れたやろ？」

「それがな、もうな、目つむつて気がついたら新宿やったんやって。すごいやろ。ぎりぎりまで病院おつてバス乗り込んだら、爆睡やわ。よー寝たでー」

こう見えて優子は看護師だった。しかも病院内では大人しめだという。

「最近うち走ってるやん？ そやから夜行バス乗っても全然足むくまんようになってん。あんたも走り。じーっと座ってパソコンばかり見てたらあかん。やっぱな、ふくらはぎの筋肉つけな。第二の心臓や。あと股関節な。寿命つてここの筋肉量に比例してるらしいで。うちのばあちゃんに聞いたから嘘かもしらんけどー」

そう言うとき空に向かって豪快に笑った。銀歯が太陽にキラキラ光って、美しいとさえ思った。優子はいつもそうだ。自分の好きなときに笑って、嫌なことにはちゃんと怒って、幼馴染で同じように育ったのにやっぱり自分とは体の作りとか神経の作りとか、いろいろと違っていた。

「ほれ」と言つて優子はズボンの裾をめくってふくらはぎを見せた。むっちりしたハムミたいな足、高校時代よりは痩せたように思うが、むくんでないのかどうかはわからない。

「えー。すごいなあそれ。高速バスなんか、もううちは絶対に無理やもんな」

「そらお金がありましたら、こういうところに住みまして、ほしてJALでぴゅーと行きますけどー。おーほほほほ」

「もう、恥ずかしいからやめてー」

と小鳥も笑った。

大通りを左に入ると、住宅街になって所狭しと家やマンションが立ち並ぶ。軒先に外車が停まった高級住宅の間を小鳥はいつも息を潜めて歩いた。でも今日は優子がいるから違う。優子はまるで美術展にでも来たかのように、いちいち家々の前で立ち止まり車やら門構えやら植物やらをチェックし感想を述べるので、恥ずかしくて、手を引いて先を急がせた。

「なあ、みんな柿取ってないな」

「わかるー。それな」

「こんな敷地狭いののに、みんな柿か八朔か柚子を植えてんのやな。ほんで柿落ちてるやん。もったいないわー。あれ、もらわれへんかなあ」

優子が、赤い実を覗かせた塀の前で動かなくなった。ジャンプするも届かない。何代か前の住人が植えたのだろう、五軒に一軒の割合で柿の木が植わっていた。そのどれもが、たわわに実ったまま熟して落下していた。カラスが寄ってきて食べたのか、大きくえぐら

れている実もある。

「ピンポンして、ちぎってええですかって聞けばくれるんちゃうの？」

「いやいや、やめてよそんなん。変な人やと思われろし」

「えー。でも買ったら柿って今高いでー。二つで三百五十円はすんで」

昔から優子は柿が好きだった。小学校の帰り道いつも山柿を取っては二人食べながら歩いた。熟した柿を皮ごとかじって、ペッペと皮だけ吐き出しながら歩くのが好きだった。あの頃は全部もったり山で取ったりしていたというのに、もはや人と関わってまで、ただで食べようとは思わなくなっていた。人と関わる煩わしさを想像すると、買って食べる方が何倍も楽だった。

マンシヨンに帰ると、夫が会社へ出かける用意をしている。土曜日は休みなのに、わざわざらしいなと思った。

「おはようございます。朝からすみません。今日からしばらくお邪魔いたします」

優子が他人行儀に挨拶をし、土産の日本酒を渡した。

「ああ、優子さん、結婚式のときはありがとう。僕、急な仕事が入っちゃってお構いできませんけどゆっくりしてください」

形だけの会話を済ませると、夫はそそくさと出ていった。

「なんか三日も泊めてもらうのやっぱ悪かったんやないの？ 機嫌悪そうな感じしたけど大丈夫やろか」

「大丈夫やって。うちらは柴田理恵とマチャミみたいな関係やからって、結婚前から言うてるんやし。柴田理恵の家にはマチャミの部屋あるらしいで。やからな、家の座敷はあんた専用の部屋よ。いつ泊まりにきてもええの。私がそうしてほしいもんな」

「あかんで、そんなん旦那さんの前では言うたらダメやで？」

もう遅い。嬉々として何回も話してしまった。その辺りからだ。結婚前と夫は変わってしまった。冷たくなったというか、同居人という感じになってしまった。

「ほらー。来て来て。あんたの部屋。布団も干して掃除しといたで」

「うわー。すごいー。主婦してるなあ。ありがとう」

二人はびかびかに掃除された座敷で、お土産の赤福を食べ、朝ドラを見、そのまま王様のランチを眺めてしばらくごろごろした。そのうち座布団を二つ折りにして、寝そべりながら既に電話で何百回もしている実家の話なんかを初めてのように話し合った。

昼からは、銀座をぶらぶらしてみた。老舗の喫茶店はドリンク一杯の値段が想像の範疇で高かったが、メニューをよくよく見ると、〈おかわり自由〉と書き添えられている。金持ちはやっぱり粹なことをするもんやなあ、と優子が言った。こうなりや、もう一杯、是が非でも飲みたい。でも予約した寄席が始まる時間が迫ってきていた。やめときゃいいの

に、やっぱり二人はおかわりをした。そして舌を火傷するくらい急いで二杯目のカフェオレを飲んで、汗だくで浅草へ移動した。

夕方四時半に始まった寄席は、既に三時間が経過していた。プログラム通りにいくと、もうすぐ林家ペーが出てくる。正直いって、ペーさん以外は誰も知らないのです、二人はペーさんを見たら帰ろうということになっていた。しかし、皆同じことを考えていたのかペーさんが終わると、ただでさえ三分の一しか埋まってなかった客席が、全員の顔を覚えられるくらいになってしまった。出遅れた二人は、帰るに帰れなくなつて、このままもう少し見ていることにした。

カフェオレをおかわりしておいて良かったなあ、と優子が言った。寄席が五時間も続くんなんて思つてもみなかった。最後の「井戸の茶碗」という演目は抜群に面白く、残つて正解だった。二人は興奮気味に寄席を出るとファミレスでご飯を食べて終電間近の電車に乗り、桜新町駅に着く頃には深夜十二時近くになっていた。高校時代に戻っていけばいくほどに、優子が帰つたあとの時間が怖かった。

駅前に停めた自転車に二人乗りすれば街の風が変わるのを感じる。いつだって運転するのは優子の役目だ。

「なあ、柿食べたいなあ」

気づくと今朝と同じ場所で優子は止まっていた。

「そやな、いずれこれも腐るだけやもんな」

「なあ、ちよつと取つてきてみるわ。このマンシヨンの柿の木やったらわからんやろ」

優子は、自転車を停めると、大きなマンシヨンの前庭に植わった柿の木の下に立った。

近づくと思つたより高くて、ジャンプしてもまったくもつて届かなかつた。ムキになつた

優子が木によじ登ろうとするが、夜中にこれはさすがにまずい。

「警察がたまに巡回してんねんで、この辺。やっぱやめときよ」

「あー、高枝切りばさみがあつたらなあ」

悔しそうに優子はまた自転車を漕ぎ出した。昔から、この筋肉質な厚い腰をつかんでいると、何だつてやれそうな氣になつたが、さすがにこればかりは無理だ。家に帰ると、既に夫は寝ていた。いつもなら一時頃まで起きているくせに。

「アマゾンで買ってみたらどうやろう？」

と優子が言つた。何が？ と思つたら高枝切りばさみのことだつた。優子はいつだつて執念深い。好きな人には二度でも三度でも告白するし、インターハイをかけたバレー部の最後の試合では、小指を骨折していたのに最後の最後までトスを上げ続けて優勝をもぎとつた。そして小鳥だつて負けず劣らず執念深い女だつた。その隣でアタックを打ち続けてきたのだから。思えば小学校の頃から、優子の上げてくれたトスを打ち続けてきた。

「そやな。アマゾンプライムやつたら明日には届くで」

小鳥は高枝切りばさみをポチツとした。

優子が帰る日の早朝、二人は住宅街を、高枝切りばさみと脚立を抱えて歩いた。まるで朝練みたいやなと優子が言った。朝六時前とあって、まだ人々は寢静まっている。

「普通にな、普通に。堂々としてたら何も怖いことあらへん」

自分に言い聞かせているように優子が言う。

「そやな、普通に。普通に」

小鳥も優子の後ろを小走りですり抜けていく。

スーツ姿の中年男性とすれ違いますが、脚立にも仰々しいはさみにも気づくことなくスマホをいじりながら通り過ぎた。自転車に乗った学生も駅を目指し一目散に走っていく。野球部あたりの朝練だろうか。斜めがけた大きなバッグを自転車の荷台に載せた姿は、自分たちの頃から変わらなくて懐かしかった。それぞれの朝が足早に通り過ぎていった。この人達が今そうであるように、自分も今まで誰のことも見ていなかったのだと小鳥は思った。警察に声をかけられたときはこう言おう、住民に怪しまれたらこうしよう、綿密に計画を立てていたのに、拍子抜けするほど誰も見てはくれなかった。殆どの人はここに柿の木があることにも気づいていないのだろう。マンションの住民やオーナーさえも柿を買って食べているのかもしれない。

マンシヨンの柿の木は、しんどそうに枝をしならせて鈴なりに実をつけていた。優子は植木業者になりすまして脚立を立て、その上に登って物干し竿みたいなはさみで柿に狙いを定める。柿の一メートルほど先の二階の部屋からは、電気シェーバーの音が響いている。その隣ではトントンと野菜を切る音が聞こえて、人々の一日が始まろうとしていた。小鳥は何だか胸がぎゅつと熱くなるようだった。

ドサツと音を立ててファースト柿が地面に落下した。

「ちよつと！ やばいやばい。キャッチ機能あつたやろ？」

小声で優子に注意する。もし誰かがベランダに出てきたら試合終了だ。優子はぺろつと舌を出して謝ると、何度か実のついてない枝先を切つてキャッチ機能の練習をした。そしてそこからは、プロのようにスムーズに柿を取り始めた。はさみで切つては、ユーフォーキャッチャーみたいに小鳥の頭上まで柿を運び、小鳥はそれを紙袋の中に収めていく。

十分ほどで紙袋はいっぱいになった。

「なあ、もうええんちゃう？ 小鳥んち、こんなに柿あつても腐るだけやろ？」

「えー。ここまで来たらもつと取りたいわ。ほんであんた大阪持つて帰ればええやん」

「まあなあ」

今度は小鳥が脚立に登つて柿を取る。同じようにキャッチ機能を練習して、柿を取りはじめると、楽しくて楽しくて夢中になってしまった。長い枝の先にぶら下がった柿は思い

の外重くて、二ついっぺんに切れてしまったときなんかは、落としそうになる。

「はよはよー。はよ取ってー」

笑いを殺しながら、優子の手元に確実に柿をまわす。まるであの頃に帰ったような胸の高鳴りだった。真面目くさった顔で優子は柿を袋に入れた。

インターハイを勝ち取ったあと、優子はすぐ病院に運ばれドクターストップを受けた。お陰で肝心のインターハイは一回戦負けだった。何度も何度も監督に食い下がって、自分はお出られると訴えたが叶うわけはなく、優子はベンチで地団駄を踏みながら声を出し続けた。あれを最後に二人ともきっぱりバレーとはおさらばして、優子は看護師になり、小鳥は結婚して大阪を離れた。

「もうええんちゃうの。あんた、そろそろ旦那さん、会社行く時間やない？」

「うん、ほな帰るか」

改めて柿の木を見上げてみると、どこを取ったかわからないくらいに、まだまだ実っていた。帰り道、すれ違う親子や小学生たちの誰も、自分たちを見るものはいなかった。「自意識過剰やったな」と優子が言って、何が可笑しいのかわからないが二人は終始にやした。

帰ったら、夫は出かけた後だった。

「なあ、あんたらうまくいったんの？」

「ああ、うん。どうやらなあ。柿は間違いなく一緒に取ってくれんな」

「まあ、それできる旦那やたらうちも結婚したいわ」

と言つて優子は銀歯を見せて笑つた。そして、玉入れの最後みたいに、袋の中から「いち、にーい、さーん」と声を出しながら一緒に数えた。よんじゅにーと言つて、吹き出し、床に倒れて笑い転げた。可笑しくて可笑しくて、明日からを思うと泣けてきそうだった。さっそく優子が柿をむき始める。その間に、小鳥は昨夜タイマーにしていた洗濯を二階へ干しに行った。

ペランダの上に広がる小さくて大きな空に、羊の毛のような雲が連なっている。何かを成し遂げた朝は気持ちがいいもんだ。あの高枝切りばさみで、来年は一人で柿を取りにいけるだろうか。優子なしでも。夫のトランクスを持ったまま空に大きな伸びをしたとき、「げげげー！ 渋柿やー!!」

という優子の叫び声が、ペランダを通り越して青空の向こうまで突き抜けていった。

「うそやー！」

小鳥は階段を駆け下りた。

優子がせっせと皮をむいてくれた四十一個と半分の柿が、立派に干し柿となり古びたペランダに揺れている。二人の柿への思いがここに実を結んだわけだが、渋を抜いてまで柿

を食べようと考えた先人の執念はすさまじいものだと思った。生命力とはそういうことを言うに違いない。

小鳥はパジャマのまま一口しかないコンロにやかんをかけ、何も無い部屋で干し柿を食べた。干し柿ってこんなに美味しかっただろうか。高級フレンチで食べた子羊のなんちゃらよりも、カウンターで食べた寿司よりも、ゴディバのチョコよりも自分達で取ってきて手でむき、干した食べ物に至極であった。部屋の広さが五分の一になったはずなのに、随分と広く感じるのは、この柿が美味しすぎるのと同じことだ。何よりもこの自由が美味しく清々しい。

あの夜、夫は、干柿が並んだ物干し竿を見た瞬間、何か吹っ切れたように別れを切り出した。反論もしないが言い訳する必要もはやなかった。

——朝っぱらから電話が鳴った。

優子が昨夜のメールを見たのだろう。相談する必要がない程にスムーズにゴールテープを切ってしまったから、この気持ちをどう説明すればいいかわからない。でもやっぱり優子の電話が嬉しかった。

「あなた、どうすんのやー。干し柿ごときで離婚て、あほか」

「あんなのせいやろー。目覚めさせたんはあんなや。あなたが教祖様やろ」

「干し柿の教祖って。うれしないわ」

「まあ、あと四十個食べてから考えるわ。とりあえず、干し柿食べにきいや」

「ほんまやな。ほな今度の三連休にまた行くわ。ほんでどこにいんの？」

大阪に帰った方が早い気がしたけど、何となく小鳥はまだここにいようと思った。優子くらいにゆるぎなく自分になるまでは、まだここで来年も柿を干そうと思った。

逃げるが父

昨夜から雨が降ったり止んだり、ぐずついた天気だった。目の前には、仏頂面した女子大生が座っている。むっちりした上半身のTシャツでミッキーマウスがおどけている。

「ずっとここにいたいのかい？ もう一度聞けど。君は沢田川を応援していたから選挙事務所に出入りしていた。それで、たまたま謝礼をもらってしまっただけなんだよな？」

「だから、何回も言ってるじゃん。誰があんなスケベジイ応援するかっての。選挙事務所へは、ただのバイトで行ってたし。しかも最後のバイト代、まだもらってないし。あーまじでへこむわー。あいつ殺してやりてー」

この口の利き方、どうにかならないのか。うちの娘が十年後こんな喋り方するようになったらと思うと寒気がする。田口結菜のジーパンは破れている、というか布の面積の方が少ないし、もはや俺たちの知る茶髪ではなかった。髪の毛の隙間から見えるピアスは人体模型だが、こんなのが今若い子の間で流行っているとは思えない。田口は椅子の背もたれにふんぞり返ると舌打ちをした。三流大学で何やってんだか。親の顔が見てみたい。

二週間大学生達を尾行して、選挙事務所に出入りするところも、自転車部隊として自転車を漕ぐ学生の姿も抑えてある。田口結菜は最近めつきり顔を見せなくなっていたが、選挙期間中にきつちりと時給制でバイトをしていたのだから違法は違法である。俺には取り締まる義務がある。

「昨夜の八時頃、四丁目のコンビニに行ったあと、向かいの吉野家に立ち寄り、その後、何名かで深夜までカラオケに行っていたね？ 最近ずっと我々、張り込んでいたから沢田川の事務所に出入りしている証拠も押さえてあるんだよ？」

昨日、署まで事情聴取に来てもらうため田口にこう電話を入れたら、一言「気持ち悪い」と言われた。ただの女子大生のストーカーじゃないかと。わかっている、その通りだと思う。誰だってこんな悪趣味なことやりたくはない。でも、これも俺の仕事だ。落選した候補者のところへ捜査が入るといっちはお決まりのやつじゃないか。

他の子達はみんな警察署で事情聴取と申っただけで、シクシク泣き出したのに、田口結菜は一筋縄ではいかなさそうだ。たまにこういう正義感の強いのが紛れているものだが、まあ時間の問題だろう。五時のチャイムが鳴り、背中に西日が燃えはじめた。さっさと終わらせて、サウナに行つて汗をかきたい時刻だが、さて。

小さな町の小さな市長選。三番手の沢田川は、最初から標的にされていたのだ。詰めが甘いんだ、詰めが。選挙管理委員会に届け出た上で、学生バイトを雇ったまでは良かった

が、バイト時間を計ると、中には日当一万以上になっている子がいる。それに自転車部隊にも、しれっとボランティア以外が混じっていた。公職選挙法違反、いわゆる買収罪だ。

素人でもあるまいし、なんでそんな凡ミスやらかすんだか。沢田川が落選した瞬間に飛びつく俺たちも俺たちなんだろうけれど、仕方ないじゃないか。シヨボい町のシヨボい事件で俺は飯を食っている。この先もずっとだ。

暇を持て余して田口がポケットからボールペンを出してくるくと回しはじめた。俺も学生の頃から手癖でやっていたっけな。あれをやる奴は出世しないと上司に言われて、いつのまにか回さなくなった。ペンを眺めながら田口が言う。

「おまわりさんさあ、こんなことやつてて虚しくないの？ 大学生捕まえて一日取り調べしてさ。暇なの？」

一応言ったことは書く義務があるが、しょうもない言葉は耳に蓋をするようにしている。世間知らずを正義と勘違いしているバカにつける薬はない。

「ねえ、一年前だったかな、女子高生の切りつけ事件あったじゃん、このすぐ近くで。あの犯人まだ捕まってるやないよね。あれどうなったんだよ？ こんなことしてる場合じゃないんじゃないの？」

「うるさい！ それとこれは関係ないだろ」

カッとなって思いきり机を叩いてしまった。田口は軽蔑した目で俺を睨むとボールペン

をポケットにしまい、溜息をついた。

去年の丁度今頃の時間帯だ。部活帰りの女子高生が通り魔に切りつけられたのは。防犯カメラには黒いパーカーのフードを被った男が映っていた。県警は捜査班を作って数カ月男を探したが、結局未だ手がかりをつかめていなかった。真冬だったので分厚いコートを着ていて大きな怪我がなかったのが不幸中の幸いだった。

忘れてしまったわけではない。でも、今も追いかけていると言うと嘘になる。自分の娘だったらと考えると許せなかったが、次から次へと新しい事件は起こるし、こんなふうにノルマだってある。上に言ってくれ、上に。

「怪我也小さかったし死にもしなかったもんね。だからいいって思ってるんだね？」

言い当てられ、はっとして、田口の顔を見た。十歳の娘と同じような濁りのない目に俺はビビっているのだと思った。その黒も白も、一番純度の高い透明を保っている。大学生になってもまだこんな目をしているなんて、この先こいつの人生は立ち行かないんじゃないかと思うが。

「ところで、カツ丼は出ないの？ お腹すいたんだけど」

ふざけてやがる。

翌日、田口結菜は上下ジャージ姿に、大きなボンボンのついたゴムで前髪をちょんまげ

にしてやってきた。できるだけ、いつも通りでいるためだそうだ。

友達に楽に稼げると誘われて、選挙事務所までバイトをし始めたこと。やってくるロクでもなさそうなおっさんにお茶を出して、相槌を打っているだけだったのに、今までチャレンジした何よりも拷問だったこと。時給二千円と聞いて行ってみれば、たったの千円だったこと。かわいくて従順な子にだけ特別手当を渡していたことに腹を立てて、最後の方は殆ど行かなくなったこと。沢田川の家のカートンが一枚二百万するということ。娘を裏口入学させたことを自慢気に喋るから説教してやったら、その辺りからパワハラ、セクハラまがいのことを何度もされ、訴えてやりたいことなど、喋りに喋った。

こいつは友達とお茶でもしていると思っているのか。俺は、娘の愚痴を聞いている父親のようだった。聞けば聞くほど、沢田川はクズだった。まあ、驚きもしないが。

「それでね、バイトしてたみんなと選挙当日、絶対に沢田川にだけは投票しないようにしようねって約束したんだ。私達あの男の前ではニコニコしながら、全員他の人に入れたんだよ。ウケるでしょ。他の人がまともかどうかは知らないけど、あいつよりはましだと思ふよ。だからあいつが落ちて本当に良かったって思ってる」

田口は、やっぱり沢田川を応援したことなど一度もないと主張した。この子はきつと、まだ世の中の何もわかっちゃいない。正義が必ず通るとでも思っているのか。

「君の将来が傷つくのが可哀相だと思うから、最後のヒントを出してやる。いいか、よく

今の状況を考える。沢田川の応援なんてしていない、お金のためにやったと言いつつ続けていると、君はずっとここから出られないんだ。さつきから何回も言っているけど、選挙期間中にお金をもらって支援するのは、犯罪なんだよ。このままじゃ私は君を書類送検しなくてはいけなくなる。もしくは法廷まで持ち込んで闘うか？ 勝てる確率なんて殆どないけどなあ……」

俺は、手元の書類をちらつかせ、大げさに話を盛って語った。

「ちよつと、それおかしいでしょ？ 悪いのは全部あいつじゃん。私達、被害者だよ。騙されたってことなんだからさ。あいつを応援してただなんて、それだけは口が裂けたって言えない」

田口は身を乗り出して俺に訴えた。

「君も強情だなあ。一緒にバイトしてた子たちは、とつとと認めて帰っていったぞ？ 君が選挙事務所で酷い目にあつたことはわかった。でもな、今回の論点はそこではない。嘘でも支援者だつたって言ってくれないと処理できないんだ。明日も明後日も、こんな窓もない部屋に来たくないだろう？」

「いいですよ。明日も明後日も来ます。分かってくれるまで話します。どうせ夏休みみなんだから」

「あのね、書類送検されると大学も退学になるし、一生それが君の経歴についてまわるこ

とになるんだ。就職だって結婚だって、まともにはいかなくなるかもしれない。君のその小さな正義を通したいがために一生を棒に振ってもいいのか？　こんなところで前科者になるなんて、親御さんだって悲しむだろう？」

——田口は俺の顔をギッと睨みつけた。そして歯がゆそうに唇を噛み言葉を飲み込んだ。しばらくの沈黙の後、両手で頭を抱えるとうなだれ、声を絞り出し喋った。

「私……応援してました。沢田川さんが市長になればいいなって……思っていました。お金をもらおうなんてこれっぽっちも思ってたし、くれるっていうのも知らなかった。ただ、当選してほしかったから手伝っていただけです」

心の通っていない棒読みの台詞を書き留める。そうそう、それでいい。こういう顔を今までに何百人も見てきた。痴漢や窃盗の冤罪も今日みたいに、流れる台詞を書き留めて、ただ俯いて処理してきた。三日もすれば、忘れ去ってまたいつもの日常に戻る。それでいいんだ。人、一人の正義なんて海に浮かぶ棒きれと同じなのだから、大きな流れの中で抗っても沈むだけだ。

俺は黙って書類を書き進める。田口は落ち着いてきたのか、出された麦茶を飲んであくびをした。そして、頬杖をつきながら尋ねてきた。

「おまわりさんて、子どもいんの？」

「ああ、いるよ。小学生の女の子が一人ね」

「へえ。じゃあ、こうやってさ、淡々と積み上げていくのがいいよ」

「ん？ なに？」

「いや、娘さんのためにはさ、格好悪くてもお父さんが傍にいてくれる方がやっぱいいもんね」

「なんだ？ 格好悪いって、聞き捨てならないねえ」

俺はムツとして、でも半分笑いなから言った。

「父さんがよく言ってたんだよね。正義が身を滅ぼすこともあるって。それでも突き通す覚悟があるときは行けばいい。だけど残りの九十九は逃げるが勝ちだってね。川は他にもいろんなところに流れているんだから、本流が決壊しても支流へ流れ着いて、また初めからやれたら、それは神様からの贈り物だって」

俺は、書類を書く手をとめ、顔を上げた。この話、昔どこかで聞いたことがあるような気がするな。誰かに言われたような……頭の片隅で埋もれていた氷山にぶつかつたみたいで、しばらく思い出そうと試みたが、時計の針を見て急いで書類を書き進めた。

数日間のぐずついた天気を一蹴したように、外はすっかり晴天だった。

「もしもーし。せんぱーい？ はい、暇してますよ。ペルセウス流星群！ いいっすねえ。今日晴天だし綺麗に見えそうですね。望遠鏡出しましょうか。じゃ、今からそっこーで行

きます」

まったく学生ってのは気楽なものだ。田口は携帯を耳にあてて喋りながら、子犬のように警察署の階段を駆け降りていった。いつも若者をここから見送る時、迷い込んだ稚魚を川に戻してやった気分になる。これで良かったのだと、きつとこの先の人生で何度も思うときが来るだろう。電話を切ると、田口はこちらを振り返り

「おまわりさん、じゃあね。お世話になりましたー」

と叫んだ。俺も手を挙げて小さく振り返した。おでこのところで、結んだ前髪が揺れている。その顔は、来た時よりも心なしか大人びて見えた。

一服した後、部署へ戻ると後輩たちがざわついている。

「何かあったか？」

「いえね、田口結菜ってさっきの子ですけど。あの子、田口司さんの娘さんじゃないですか？」

「え……まさか。田口司って、あの田口さん？」

「はい。五年前の立てこもり事件で殉職された、田口警部です」

「いやいや、田口なんて全国にいくらでもいるだろ」

「でも、ほら」

後輩が差し出した田口司警部の名簿の家族の欄には〈娘・結菜〉と書かれていた。

あの口の悪い田口結菜は、俺たちが敬い続けてきた人の娘だったというのか。見てみると思った親の顔は思い出さずとも容易に浮かぶあの人だったと。ああ、目尻の下がった感じとか、ぶっきらぼうな喋り方も、よくよく思い返すと田口さんそのものじゃないか。

課は違ったが、田口さん知らない者はいなかった。風来坊のように縦横無尽に課を渡り歩く異端児で、権威にとらわれず誰からも慕われる人だった。俺たち新人がへこんでいたら、そっと近寄ってきて、背中をバシバシ叩きながら鼓舞してくれた。あの子が言ったのと同じように。

「逃げるが勝ちのときもある。正義に押しつぶされんなよ」

そう言った本人は逃げなかったのだから。

あの日、田口さんは最後まで犯人である青年を説得しようとしていた。あと一歩というところまできて、逃げ出そうとした人質に逆上した犯人が切りかかり、揉み合いになった末、刺されてしまった。田口さんの死は自分の正義に押しつぶされたからではなく、守るべき信念の末の結果だったのだと思いたい。それが田口結菜の中にしっかりと受け継がれているのなら、その正義は充分に意味のあるものだったのだ。

俺は今、何度目の支流を流れているだろう。どんどん狭くなっていく正義の川幅を、これから先、一度でも自分の意志で守ることができるのだろうか。窓の外、快晴の空には虹

が架かって、それは田口結菜の大学の方まで繋がっている。俺はボールペンを回しながら、薄暗い廊下を歩いた。

猫の恩返し

「おはよう、みーこ」

朝起きて、枕元で眠るみーこに呼びかける。

まだ眠っているみーこの美しい毛並みをなでなでして、口元にキスをする。ん？ ん？
もう一回キスをする……。ん？ ん？ ん？ なんか変な匂いしない？ え、みーこお漏らし？
まさかまさか。すんすんすんすん。みーこを起こさないように私は、ベッド周辺をかきまわった。私の異変に気づいたのか、みーこは愛らしい目をパチクリと開けてしまった。

「あーん、みーちゃんごめんね、起こしちゃったねえ」

まだ夢うつつのみーこを腕の中に入れて、喉元をさわさわした。みーこが三角形に大きく口を開いてあくびする。

くさっ！ くさっ！ え、何？ みーこどうしちゃった。私は鼻を押さえてもう一回みーこの口元に顔を近づける。うげー。鼻を押さえていても臭い。どういうことだ。昨日のご飯が歯に挟まっていたりするのだろうか。いや、もっと大変な内臓の病気かもしれないな

い。愛しい恋しいみーこ、あなたは どうしてそんなに臭いの。

私はみーこを抱きしめるふりをして必死に口の中のをのぞいた。大丈夫だ。鋭い牙は健在だ。私はこの四本の牙を見る度に、ああ、こやつらはトラやライオン様と同じ先祖を持つのだなと、野に解き放つてやりたい衝動にかられるのだ。そんなことしても、箱入りみーこは生きていけないとわかつているが、野性の魂を私が握っていて果たして良いのだろうか、という葛藤はいつも心のどこかにある。用意されたトイレ、袋に入った食べ物、首につけられた鈴、トラの子孫ならば大草原を思いっきり走ってみたかろう。その牙を、首筋にがぶりと立ててみたかろう。いや、ライオンやトラがネコ科なのだからネコの方が始祖ということになるのか。

そんなことはどうでもいい。とにかく動物病院へ連れて行こう。パジャマを脱ぎ飛ばすと、朝ごはんを食べ終えたみーこを籠に入れ、食パンの耳をくわえて最寄り駅へと急ぐ。本当はタクシーに飛び乗りたいところだが、もうすぐ家賃の引き落としがあるので我慢してもらおう。籠に入れられたみーこは、ニャーニャーと泣いて脱出しようとして必死だ。私は籠につけられた小窓を開けて

「みーちゃん、三十分の辛抱だからね。ごめんね」

と声をかける。今日は幸いにも午前中に予定された撮影がリスケになり空いていた。私達についてるよみーちゃん。きつと、きつとすぐに良くなるよ。逸はやる気持ちを抑えて、電車

を乗り継ぎ掛かりつけの病院へと急いだ。

「はーん。虫歯ですわねー。奥歯が二本、結構ひどいねえ」

おでこにつけたライトを消すと先生は、よく頑張ったねとみーこを撫でた。

「良かった、ただの虫歯なんですわね」

大きな内臓の病気でないことに胸をなでおろした。

「みーこちゃんは、今年で、じゅうにー……」

「十三歳です」

「そうだよわね、もう結構なお年だから、虫歯になるっていうのはよくあることです。心配はいらないよ」

先生はみーこを抱っこして、語りかけるように喋った。そして一呼吸置いて今度は私の目を見て言った。

「でも、抜くしかないんだよわねえ。放っておいたら菌が体に入ってしまったって死ぬことだってある。それに猫だって虫歯は痛い。だから辛くなる前にね」

「え、でも奥歯二本も抜いたらごはんが食べられないですよ」

「それがわね、臼歯ってネコにはほぼ必要ないの。この四本の牙で食べてるんだよ。だから抜いても問題ないの」

「へー！ そうなんですか。牙つてやつぱ役に立ってるんですねー」

「そりゃそうだよー。肉食動物なんだから。ねえ？」

先生はみーこの顔を覗き込むと、にこりと微笑んだ。しかしここからが本題だった。みーを下ろすと先生は椅子に座りさつきまでとはちがう表情で続けた。

「でね、抜くのは全身麻酔になるのね」

「全身麻酔……大丈夫なんでしょうか？」

「みーちゃんはしっかり体重もあるし大丈夫だと思っただけ、万が一がないとは限らないんですね。承諾書に説明が書いてあるので、よく読んでサインしてもらってからになります」

「はあ……」

確かに親知らずを抜く時、私もこういう〈何かあっても文句を言いません〉みたいなことが書いてある紙にサインさせられたな。自分のことなら平気だけど、麻酔をしたままみーが起きてこなかったらどうしよう。考えただけで血の気が引いていく。

「それで、この子はペット保険には入ってなかったかな？」

「は、入ってないんですね……」

さらに別のドキドキが襲ってきた。いつも良くしてくれる赤ひげ先生だが、こればかりは半額になんかしてくれないだろう。

「手術の費用が、十万円かかっちゃうんだよねえ」

「え！　じゅうまんえん?!」

「そう……ちよつとねえ。かかっちゃうんですねえ」

私の驚きようが下品だったからか、先生は首をすくめて苦笑いした。

「だ、大丈夫です。払います。みーこのためですから」

「わかりました。では、これね、承諾書にサインしてください」

困った、十万円払ったら私の貯金通帳はすつからかんのすつてんでんだ。それでも私はみーこを守らねばなるまい。家族なのだから当然のことだ。承諾書にサインをし、先生と手術の日程を立てる。先生は、一番早い日で二週間後のこの日になりますと、壁にかかった猫のカレンダーに赤丸をした。よかった、ついてるついてる。私もその日は夕方から空いていた。

「では、病院が閉まった夕方五時頃から始めましょう」

「わかりました。よろしくお願いします」

また電車で揺られながら私達は家に帰った。

昼からは編集作業が入っている。みーこに水と夕飯を用意すると、私は駅へ走った。選挙カーに乗ったウグイス嬢たちが、「お願いします」を連呼しながらこちらに手を振ってくる。お願いしたいのはこっちの方だ。来月の家賃と手術のことを考えると頭が痛かった。

親に金を無心する歳でもないし、深夜のコンビニのバイトを増やすべきだろうか。師匠に頭を下げて借りるしかないか。

映画監督を目指し上京して早八年がたとうとしているが、短編を数本撮っただけでまだ何の評価も得られてなかった。「君には光るものを感じる。映画祭でそろそろ小さい賞を取ってもおかしくないんだけどね」と師匠は言うけれど、数年前から同じことを言っている気がする。そういう師匠だって最近では招待さえされないじゃないか。おまけに最近の映画を撮らなくなってしまって、ミュージックビデオやCM撮影の仕事がときたま入るくらいだった。「そろそろこっちに帰ってきなさい」と父は正月のたびに心配した。無理もない。男手一つで私を育ててくれた人だ。そろそろ身の振り方を考えねばならないだろう。今日は師匠の知り合いの映像作家から依頼された映像を編集する。金沢の呉服店の宣伝動画らしかった。三十時間だ。三分半の本編のためによくもまあ撮ってくれたもんだ。隣と一緒に映像を見つめる師匠は最近だんだんとお腹が出てきて、作家としての牙もなくなってきた。こんなおやじと私は付き合っていた時期があったなんて血迷っていたとしか言いようがない。あの頃は映画監督という肩書だけで、まあまあかっこよく見えていたのだろう。浮気されて別れた途端にただのおじさんになってしまった。遅めの昼ご飯にパンの耳と豆腐を食べながら、私は切り出してみる。

「師匠、あのですね、みーこが虫歯になってしまいました」

「へー。虫歯」

弁当をほとんど噛まずに飲み込みながら師匠は気のない返事をする。

「それで、手術をして抜くことになったんですね」

「かわいそうだねーそれ」

モニターでは金沢の小道をしゃなりしゃなりと芸妓さんが歩く映像がエンドレスで流れていく。

「そのー、治療費がですね、十万円かかるんですね」

「うわあ、すごい」

「その、できたら、半分払ってもらったり。もしくは貸してもらったりっていうのは……」

「やっべ、打ち合わせ入ってたの忘れてたなあ。じゃあ、あと編集お願いねー」

師匠はのり弁をかき込むと、逃げるように出ていった。いつも逃げ方が下手くそだった。付き合い始めてすぐに私の家に転がり込んできた師匠は「俺の命よりも大事な猫だ」と言ってみーこを連れてきた。ページュ色のふわふわした毛を揺らしながら、みーこは私の部屋を注意深く観察し、やがてこたつの隅っこにもぐってあどけない表情で眠った。私は一瞬で恋に落ちた。出産後の女性のように、男のことなどもうどうでもよくなっていた。

二週間もすると、師匠は他の女の家に入り浸るようになり、みーこと私を捨てた。正確には私とみーこが師匠を捨てた。

「昔の男の猫よく飼ってられるね。思い出さないの？」とか言われるけど、思い出すのも、今だって何食わぬ顔で一緒に仕事しているもの。私は変なところで図太いらしいが、もし逆にみーこを連れて出ていかれていたら、発狂して「みーこを返せ」と女の家に殴り込みに入ったに違いない。だからやっぱり私はついでにいるのだ。

手術当日、ミュージックビデオの撮影は長引いていた。「夕方の五時には来てね」と言われていたのに、スタジオの時計の針は三時半を指している。女優の衣装がイマイチしくりこないのだという。私はそわそわし始めていた。ピンクでも赤でもいいから早くしてくれ。

四時を過ぎたところで、お腹が痛いと言いトイレに行くふりをした。廊下のテーブルに置いていたくたびれたリュックを背負うと、私の足は理性を無視して一目散に駅に向かって駆けだしていた。尻のポケットで携帯が鳴っている。知ったことか。電車を降りて走って走って、汗だくで家の玄関を開けると、全てを察知したかのようにみーこがすり寄ってきた。

「みーちゃん、ごめんね遅くなって。さあ行くか」

籠にみーこを入れると表通りに出る。私はもう駅へ走らなかつた。右手を高々と上げる。みーこと同じ色をしたタクシーが目の前で停まつた。

「川島動物医院までお願いします」

運転手は勢いよく車を発進させた。ちょうど夕焼け小焼けのメロディーが街の喧騒を包み込み、どつと汗が吹き出した。この時間帯はいつも激混みの環八通りを、タクシーは順調に滑っていく。良かった、私達ついてるよみーちゃん。

「このラーメン屋を左に」

と言うか言わないかの瞬間だつた。

ズドーン!!

私は、運転席に思いきり頭をぶつけていた。シートベルトをしていなかったことを後悔した。みーこは？ みーこ、みーこ。良かった、私の膝に載せた籠は何事もなく無事だ。どうやら玉突き事故らしい。外に出ると後続の車のライトが粉々になっている。そんなことより病院だ。私は全然平気。血とか出てない、腕も足も首も動く。ひたすら謝る運転手にかまつている暇はないのだ。病院へ行かなければ。今後のためにと運転手と名刺を交換し、籠を抱えて私は病院まで走つた。扉を開けると、先生が心配そうに待っていた。みーこを籠から出すと、興奮気味に走り回っている。事情を話すと、厳しい表情で先生は言っ

た。

「今日はやめといた方がいい。みーちゃんも興奮気味だし、それにあなた本当に大丈夫？ 首とか痛くないの？」

「私は全然、この通り」

腕と足をぐるぐると回す。首も。——あれ？ 首が、首が痛い。さっきは平気だったのに、首が、首が曲がらない。そういえば頭もずきずきしてきている。

「先生、痛いです。首が痛いです」

「ほーらー。ここじゃ見てあげられないから人間の病院へまず行こう。むち打ちって放っておくと後で怖いんだよ。抜歯は改めてにしましょう」

「は、はい」

私は人間の病院で全治一カ月のむち打ちと診断された。みーこは私の固定された白い首を見ると悲しそうに泣いて膝の上に乗ってきた。幸いみーこに怪我がなかったのが何よりだった。ただ口の臭さは、まったくもって可愛くないレベルに達していた。

数日後、突然電話がかかってきた。

「この度は本当に大変でしたね」

と保険会社の女性は恭しく労ったあと、「それですわね」と声色を変えた。

「今回、治療費以外にも慰謝料というのが出まして」

「はあ」

「それがですね、十万円ほどになる見込みなんです」

「え！　じゅうまんえん！」

私はガンダムみたいな首のまま小躍りしていた。みーこは美しい毛を風になびかせながら、にゃーんと一声ささやき、私の顔を見てにんまりと微笑んだ。